

新しい楽しみ

朝吹真理子

家にいる時間が長くなったので、花を飾ることがふえた。買い出しの帰りに花屋に寄っている。夫も私も二月なかばから家で仕事をしているから、一日のほとんどを同じ場所で過ごしている。マンションなので、ベランダをみても屋根とビルしかみえない。このままずっと、家のなかにだけいたら気落ちしそうだと危機を感じて、さいしょはベランダに鉢植えを置いた。ベランダに緑があるだけで窓を閉めていても葉がそよいで風を感じる。部屋と外の境界があいまいになって心地良い。花の鉢植えは難しそうだったので、花は切り花を買っている。

感染症が流行る前は、季節ごとに一度、気が向いたときに花を飾るくらいだった。お祝い事のように急に大きなブーケをいただいたときは花瓶がなくて、パスタ容器に挿したりしていた。夫と二人で、朝ごはんのときに花をみて、きれいだね、と言いながらも、その花が枯れたらそれでおしまい、二人の生活に定着してこなかった。思いも寄らないきっかけで、花の名前をおぼえる生活になった。感染症は恐ろしいけれど、それでも生活はつづくのだから、新しい楽しみがちよっとでもみつかったのは嬉しい。友人はレストラン代が浮いて節約になると思ったら花をもとめるようになった。芍薬二十本、チューリップ二十本と、気づけば

ば花貧乏になっていると言っていた。

水をかえるとき、茎の色や葉脈のかたち、花の背の部分を見る。透明な花瓶から水があふれて、シンクに流れて光るのはきれいだ。枝切りをしたほうが花が長持ちすると母が言っていた。切ってみようと思ったのに家に文房具屋で売っているような鋏しかなくて、やわらかな茎しか切れなかった。夫と、持ち手や刃の美しい値のはる花切鋏を買うか、安価で便利、しかし蛍光色の無骨なものかで迷って、結局、無骨な方をえらんだ。オニヤンマみたいな色合いをしている鋏で、届いたときにちよっと後悔したけれど、ものすごく切れ味がよい。便利な道具があると、ますます花屋に寄るのが楽しくなっている。

枯れた草花も好きなので、ユーカーリは枯れたまま、花瓶に挿している。あじさいも枯れたまましばらく飾っていた。あじさいの花が褪せてしぼんでいるのも、シュー生地みたいできれいだった。昨日は夫が白と赤のダリアを買ってきた。おおぶりの花が好きではないと言っていたのに部屋にずっといると好みも変わるらしい。部屋に置いてみると、ダリアは、緑日で子供が締めている兵児帯のようにみえた。今年は浴衣を着る機会があるのだろうかと思ひながらみている。



Hisako MASUDA

朝吹 真理子(あさぶき まりこ)

東京都生まれ。作家。『流跡』で第20回Bunkamura文学賞受賞、『きことわ』で第144回芥川龍之介賞受賞。著書に『TIMELESS』『抽斗のなかの海』などがある。

増田 妃早子(ますだ ひさこ)

大阪府生まれ。画家。1985年京都市立芸術大学美術学部美術科卒業。個展、グループ展で作品を発表。